論　文　内　容　要　旨

Detailed course of depressive symptoms and risk for developing depression in late adolescents with subthreshold depression: a cohort study

（思春期後期の閾値下うつにおける抑うつ症状の推移とうつ病発症リスクに関するコホート研究）

Neuropsychiatric Disease and Treatment, in press.

主指導教員：山脇　成人教授
（応用生命科学部門　精神神経医科学）
副指導教員：栗栖　薫教授
（応用生命科学部門　脳神経外科学）
副指導教員：岡本　泰昌准教授
（応用生命科学部門　精神神経医科学）

神人　蘭

（医歯薬学総合研究科　創生医科学専攻）

【背景】

閾値下うつは，抑うつ症状を有するがうつ病の診断基準を満たさない状態である。閾値下うつを有する割合は，10 代中頃をピークにその後減少するが，うつ病の有病率は 10 代中頃から 20 代中頃にかけて増加することが報告されている。すなわち，思春期後期は閾値下うつからうつ病への臨界期で，うつ病発症リスクの高まる時期と考えられる。これまでの研究では，思春期から成人期にかけて数年単位の抑うつ症状の変化を評価した報告は散見されるが，より詳細に抑うつ症状の推移やうつ病発症を観察した研究はない。そこで，本研究では思春期後期の大学生を対象に，1 年間の抑うつ症状の推移を詳細に観察し，閾値下うつがうつ病発症のリスクとなるかについて検討することを目的とした。

【方法】

対象は 18 歳から 19 歳の新入大学生である。入学前の健康診断で自記式うつ症状重症度尺度である Beck Depression Inventory 2nd edition（BDI-II）を実施し，その BDI-II の得点によって 18 歳から 19 歳の新入大学生を抑うつ症状低群（BDI-II≦10, n = 1918），抑うつ症状中群（11≦BDI-II≦17，n = 276），抑うつ症状高群（BDI-II≧18，n = 87）の 3 群に分類した。抑うつ症状低群と中群からはランダムに対象を抽出し，抑うつ症状高群ではすべての者に連絡をとり，研究説明を実施した。研究説明会で研究参加の同意を得られた者に対して構造化面接（Composite International Diagnostic Interview：CIDI）を実施し，過去 1 年に大うつ病エピソードに当てはまる者を除外した。そして，抑うつ症状低群（n = 66），抑うつ症状中群（n = 56），抑うつ症状高群（n = 54）の 3 群に対して，2 ヶ月ごとに抑うつ症状を評価するため BDI-II を実施し，12 ヶ月後には BDI-II の評価と CIDI によって大うつ病エピソードの有無を評価した。

3 群の BDI-II 得点の経時的な変化は線形混合モデルを用いて解析した。また，個人の BDI-II 得点がどのように変化するかを検討するために成長混合分布モデルを用いた。12 ヶ月間での大うつ病エピソードの有無について 3 群での差を検討するためにフィッシャー検定を用いて群間比較を行った。

本研究は広島大学倫理委員会にて承認を受けた研究計画に従い，すべての対象に対して研究内容について十分な説明を行い文書にて同意を得た。

【結果】

線形混合モデルを用いて 3 群の BDI-II 得点の推移を検討した結果，3 群で有意な交互作用はなく，群の主効果のみが有意であった。多重比較の結果から，3 群間で BDI-II 得点に有意差が認められた。成長混合分布モデルを用いて個人の BDI-II 得点の推移を検討した結果，3 つのクラスが算出された（抑うつ症状不変クラス，抑うつ症状軽減クラス，抑うつ症状増悪クラス）。抑うつ症状不変クラスでは抑うつ症状に有意な変化はなく，このクラスは抑うつ症状低群の 63 名と抑うつ症状中群の 2 名が含まれた。抑うつ症状軽減クラスでは抑うつ症状が有意に減少し，このクラスは抑うつ症状低群の 3 名，抑うつ症状中群の 49 名，および抑うつ症状高群の 29 名が含まれた。 抑うつ症状増悪クラスでは抑うつ症状が有意に増加し，このクラスは抑うつ症状中群の 4 名，抑うつ症状高群の 22 名が含まれた。CIDI を用いて大うつ病エピソード発症の有

無について検討した結果，抑うつ症状高群の 3 名にのみ大うつ病エピソードの発症を有意に認めた。

【考察】

本研究の結果から，入学時に閾値下うつを有する（抑うつ症状高群）思春期後期の大学生は，1 年間を通して抑うつ症状が増悪する者と軽減する者に分かれることが明らかになった一方で，抑うつ症状低群と中群に含まれる多くの者は，1 年間を通して抑うつ症状が軽減または低いままであった。また，閾値下うつを有する思春期後期の大学生の中には，うつ病の発症まで進展していく可能性が示唆された。したがって，閾値下うつの変化については，経時的に評価する必要があり，リスクを伴う者への早期介入の必要性が示唆された。本研究の結果は，1 年間を通して閾値下うつの経時的推移とうつ病発症リスクについて明らかにしたものであり，思春期後期の閾値下うつからうつ病への発症過程を理解する上で重要な知見と考えられた。

（1802 字）